

## 令和3年度 新見高等学校(南校地) 具体的計画

学校経営目標	1 校地間、学科間、学校と地域や家庭の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 特に校地間・学科間の「融合」に向けた取組の推進 2 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力等を育む効果的な教科指導の工夫 特に1人1台端末の有効な活用方法の研究 3 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 特に昨年度中止となった地域連携活動の復活と中学校との連携を継続発展 4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開 特に「新見高校広報全体計画」の具現化									
	番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準【評価指標】	中間評価 達成状況・今後の対応	最終評価 達成状況	結果の分析及び改善方策	総合評価	
1	教務課	内規の改定にむけて 校地解消に向けた内規の改定に向けて、校地統合委員会の進捗を受け、作業を進める。 これまで進めてきた関係部署への情報収集をもとに、令和3年度改定計画を立て、令和3年度末までに予定の改定を速やかに行う。	昨年度までの情報収集によると、校地解消に向けた改定の他に、南北校地となり16年が経過し、統合当時に決定された内規と現状のずれ不整合が散見されている。校地解消に向けた大きな改定と、継続できる内容における現状とのずれを解消する改定を整理した改定計画を立て、確実に改定を進めることが望まれる。	校地統合委員会の進捗に合わせ ① 内規改定計画が完成する。 ② 計画に基づいたアクションを起こす。 ③ 計画に基づいた今年度の改定案が関係各所で出来上がり、来年度施行できる。 A…①②③ B…①② C…①	①完了 ②完了 ③現在先生方からの意見を回収→とりまとめ→関係各課へ配布の上検討依頼(11月末×切)→12月合同運営委員会、1月合同職員会議に諮る予定	B	①完了 ②完了 ③中間評価後関係各所検討後の内規案をもとに内規協議計画作成完了し、現在スケジュールに沿って各会議にて審議中。また、2月、3月には臨時号道職員会議の開催も計画済み。全て完了出来る見通しが立っている。	A	内規改定については、令和5年度に向けて、令和6年度に向けて、改定や差しかえが必要な部分があり、来年度以降も引き続き改定や差しかえを継続する予定。	A
	進路指導課	両校地の生徒理解に努め、個別最適化の教育を研究し、指導力向上を図る。 他校地の生徒理解の一助として、他校地の授業参観を行う。	南校地の生徒の状況は把握できているが、北校地の生徒については、部活動を除いて、学校生活のほとんどが把握できておらず、生徒理解ができていない状態である。	公開授業週間に北校地の授業を参観し、授業参観をした教員の割合で評価する。 100%ならA評価 80%以上100%未満ならB評価 80%未満ならC評価	6月に公開授業週間を設け、南校地の教員は、ほぼ全員が北校地の授業を参観することができた。 他校地の授業を見ることで、南北校地統合へ向けての新たな気づきもあり、その意見集約をアンケートをとり、まとめることができた。	A	6月と11月の公開授業週間で、南校地の教員は、全員が北校地の授業を参観できた。それにより北校地の状況の理解を深めることができた。	A	6月の公開授業週間では、事前に参観する日を全員に調査し、一覧表にした上で、北校地の教員に連絡することで、スケジュール調整ができ、ほとんどの方に参観してもらうことができた。一方で11月は個別に日程調整をしてもらい実施したが、参観者が減少した。効果的な授業参観にするには、様々な負担が必要になるが業務の効率化の観点からも来年度以降も工夫しながら意義あるものになるよう実施していきたい。	
	進路指導課	校地解消後の普通科の進路指導を、教員・生徒が共通して理解できるシステムを構築していく。 南校地の生徒用の『進路指導の手引き』を作成し、全生徒に配付し、普通科科訓である「高仰～明日の私は、私が創る」を体現できるよう活用する。	指合わせにも挙げられている課題であるが、北校地には進路指導の手引きがあるが南校地にはない。 教員用の『新見高校(普通科)進路指導』は年次更新してすでにある。	3学年とも手引きを作成し、学年として手引きを活用した指導を実施できた場合はA評価 3学年とも手引きを作成し、生徒に配付できた場合B評価 B基準以下ならばC評価	3学年とも『進路指導の手引き』を生徒に配付し、面談等で活用することができた。 今後、改善や見直しが必要なところをピックアップし、よりよいものにしていきたい。	A	『進路指導の手引き』は、全学年で、年5回の個人面談、進路指導等で活用することができた。合わせて『面談の記録』の冊子も作成し、面談前に必要事項を記入するとともに、面談の内容を記録し、振り返りができるようにしたことで、面談を単発でなく、連続性をもつものにできた。	A	本年度の学校自己評価アンケートの質問「進路指導の手引きを作成し、主体的に行動できる生徒の育成を図り、家庭への情報提供や連携に活用している」に対し、生徒(81.7%)、保護者(67.2%)、教員(95.3%)が肯定的な回答であった。教育的効果もあるので、改訂をし、次年度以降も活用していきたい。	
	厚生課	各担当ごとの年間通しての業務内容を明確化する。	各担当以外の業務について課内での共通理解が十分図れていない。担当者が毎年交替することも多く、業務内容を「見える化」し、業務負担の軽減・平準化・計画性を高め、引き継ぎを円滑に行う必要がある。	業務内容を表にまとめ、業務の見直しを検討する。 A 業務負担の軽減が図れた B 見直しができた C 他の担当業務内容を理解した	各係の先生それぞれで、仕事をすすめてもらっている。しつかり遂行できているものもあるが、若干明確でない業務もあり、表の作成で見直した	B	今年度において、各係での業務内容の表をまとめ、各担当ごとの反省や改善点を見いだすことができた。	B	業務の内容や負担が、偏っている部分がある。これをもとに、各先生方の要望も聞いて、来年度の業務の分担を見直していきたい。	
国語科	新課程・入試改革・複数校地解消統合に向けて、科内研修を充実させるとともに、他教科・校地と連携し、学校全体の言語活動の充実に努める。	各自が校外研修に参加したり、新テストに向けた授業を実施したりしているが、科内だけでなく、他の教科・校地と連携・情報共有して取り組むことができるとよい。	A: 研修5回以上、かつ他教科または北校地と連携がとれた。 B: 研修5回以上、もしくは他教科、または北校地と連携がとれた。 C: どちらもできなかった。	研修は、校内模試の作問検討2回・オンライン研修会の資料共有1回、計3回を実施。 他教科との連携は科としてはできていない。 北校地との連携としては、両校置間での授業見学後に意見交換ができた。	B	研修は、校内模試の作問検討4回・オンライン研修会の資料共有1回、計5回を実施。 他教科との連携は科としてはできていない。 北校地との連携としては、両校置間での授業見学後に意見交換ができ、研究授業の参観も行えた。	A	研修は、校外のものへの参加も増やしていきたい。 他教科との連携を科として行うための工夫が必要であった。 北校地国語科との連携は、授業見学・意見交換以外にも共同で授業研究・教材開発等の取り組みができるとよかつた。		

## 令和3年度 新見高等学校(南校地) 具体的計画

番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準 【評価指標】	中間評価		最終評価			総合評価
					達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	結果の分析及び改善方針	
<p>学校経営目標</p> <p>1 校地間、学科間、学校と地域や家庭の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 特に校地間・学科間の「融合」に向けた取組の推進</p> <p>2 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力等を育む効果的な教科指導の工夫 特に1人1台端末の有効な活用方法の研究</p> <p>3 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 特に昨年度中止となった地域連携活動の復活と中学校との連携を継続発展</p> <p>4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開 特に「新見高校広報全体計画」の具現化</p>										
2	進路指導課	iPadを進路指導課に関する大学研究、職業調べ、各種調査などに活用する。 具体的には、大学の模擬授業の視聴、学習実態調査で活用する。「〇〇先生と勉強しよう」など斬新な効果的な取組も思案する。	今年度から年次進行で導入される一人一台端末の活用が求められている。	1年次生の学校自己評価アンケートなどを利用し、活用できたと回答した生徒の割合で評価する。 80%ならA評価 60%以上80%未満ならB評価 60%未満ならC評価	1年次生は、大学の模擬授業や大学研究等(具体的には、夢ナビ、オープンキャンパス調べ、岡山大学学部研究)でiPadを活用することができた。進路指導課として、更なる活用方法や場面を研究していきたい。	B	本年度の学校自己評価アンケートの質問「ICT活用、iPadの有効活用方法の研究とそれらを活用した効果的な指導を行っている。」の質問に対し、1年次生は86%が肯定的な回答であった。	A	1年次では、マインドマップを作成する際に、Jamboardを活用するなど、様々な場面でiPadの活用した。教員も試行錯誤しながら、効果的な活用方法を模索しているが、今後も研究、実践をしていきたい。	
	厚生課	「朝読」のさらなる充実させるとともに、図書委員会を活性化させ、より効果的な広報活動や新見市立図書館展示等のイベントを行うことにより、生徒の図書館利用を促進し、図書貸し出し冊数の増加を図る。(前年比5%増を目指す。)	昨年度、以下のような取り組みにより貸出冊数が大幅に増加した。(R元年度220冊→R2年1196冊) ①「朝読」で読む図書の貸出 ②休校期間中に読むための図書の貸出(3年生) ③図書館オリエンテーションの実施による意識づけ(1年生) ④GTでの図書館活用(2年生) ⑤進路関係図書の貸出(3年生)	貸し出した本の冊数が、前年度比で A: 5%以上増加(1260冊) B: 昨年度並み(約1200冊) C: 昨年度より減少	9/22時点で、貸出冊数が777冊であった。これは、上半期では、昨年度の半分以上の貸出冊数となっている。これまでの取り組みとしては、1年生対象の図書館オリエンテーションや2年生のGTの資料としての活用があった。2年生の貸出冊数が多く、1年生にさらなる活用を促したい。	B	1/11時点で、貸出冊数が1194冊であった。1ヶ月につき約132冊の計算になり、年度末まであと2ヶ月半ほどあるので、目標の1260冊を超えることはできると予測した。今年度の取り組みとして、「図書館NEWS」「図書館だより」の発行や「図書館LibraryNews」の掲示を行い、生徒の興味関心を喚起した。また、11/10～11/24の期間、新見市中央図書館で「切り絵・ちぎり絵の世界」というテーマで展示を行い、市民の方から好評を得た。	A	貸出冊数については、順調に伸びてきている。今年度取り組んできた広報活動や、文化祭及び新見市中央図書館での展示等を継続し、本校図書館のさらなる活性化に寄与したい。	
	芸術科	芸術の各教科の年間の指導にiPadの活用を取り入れ、教科指導をより効果的に行う。	今年度初めて、各教科においてiPadの活用を取り入れる。作品の撮影や表現の録画といった記録、Jamboardを利用した協働学習など、さまざまな活動で少しでも多くiPad活用を取り入れていけるよう、活用に関する研究を進める。	各学期において、教科指導にiPad活用を取り入れた回数 A…5回以上 B…3回以上 C…3回未満	学期を通して、様々な活動において積極的にiPadを活用している。各教科間での情報共有を密にし、研修を重ねることが出来ており、今後さらに活用を深めたい。	A	学期、年間を通して、さまざまな活動において積極的にiPadを活用出来た。また、iPadの活用によりこれまでにない学習効果を上げることが出来た。	A	より効果的な利用方法を研究し活用したい	
	1年次	1年次の教員は、より生徒が効果的な学習ができるように、1年次の担当科目においてiPadを活用した授業を実施する。	今年度から一人一台端末が導入されるが、その効果的な活用方法についてはまだ研究途中である。	生徒にアンケートを実施し、iPadを使った学習を通して、知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力が向上したと回答した生徒の割合で評価する。 A 8割以上が肯定的回答 B 7割以上が肯定的回答 C B基準未満	9月中旬に一人一台端末についてのアンケートを実施した。「知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力が向上した」に肯定的な回答した生徒は84%であった。一方で、「デメリットを感じる」の回答には、「紙辞書の方が良い」、「アプリの使い方がよく分からない」という記述があった。質の良い学習につながる辞書指導のあり方を今後検討する必要がある。	A	1月中旬に再度アンケートを実施した。「知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力が向上した」に肯定的な回答した生徒は86.7%であった。	A	「今後行ってほしいこと」として、授業の録画、リモート授業を挙げている生徒が数名いた。家庭学習の補助として有効だと思われる活用方法を今後も積極的に模索し、実践していきたい。	

## 令和3年度 新見高等学校(南校地) 具体的計画

学校経営目標	1 校地間、学科間、学校と地域や家庭の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 特に校地間・学科間の「融合」に向けた取組の推進 2 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力等を育む効率的な教科指導の工夫 特に1人1台端末の有効な活用方法の研究 3 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 特に昨年度中止となった地域連携活動の復活と中学校との連携を継続発展 4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開 特に「新見高校広報全体計画」の具現化				中間評価		最終評価				
	番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準【評価指標】	達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	結果の分析及び改善方策	総合評価
2	地歴・公民科		ICTの活用などによりわかりやすい授業と効果的な発問により、確かな学力の定着を目指す。生徒の思考力を向上させ、問題解決力を伸ばす指導を行う。	生徒の教科への姿勢は、地理歴史・公民科の目指す、思考・探究的な学習ではなく、暗記的な側面を強く印象付けたものになっている。	生徒に対して行う授業アンケートにおいて、「ICTの活用などによりわかりやすい授業となるよう、工夫されているか」、「効果的な発問により、思考力を育成する授業となるよう、工夫されているか」という項目を設け検証する。 A:「非常に満足している」と「だいたい満足している」が95%以上 B:「非常に満足している」と「だいたい満足している」が90%以上95%未満 C: Bに満たない	地歴科・公民科すべての科目において教材提示装置等を活用した授業を行っている。生徒の視覚に訴え、生徒全体で情報を共有し、より深い理解が得られることに寄与していると感じている。	A	1学期と2学期に実施した授業アンケートでは、「ICTの活用などによりわかりやすい授業となるよう、工夫されているか」、「効果的な発問により、思考力を育成する授業となるよう、工夫されているか」という質問に対して、どちらも95%以上の生徒が「満足している」と回答している。	A	①ICT活用において一定の成果を上げることができた。 ②次年度以降は一人一台端末の活用について研究していきたい。 ③ICTの活用と同時に、授業に関するその他の要素も改善を図る必要がある。	
	数学科		教員・生徒のiPad導入に併せて、教科内でiPadやGoogle-Workspace for Education、デジタル教科書等の効果的な活用を検討・実施する。	個人での活用は行っているものもあるが、教科全体としてiPad等を活用した取組は行っていない。教科としてどのような取組がどのような場面で効果的であるのかを検証することができていない。	A: 7月、1月の授業評価アンケートにおいて、項目「ICT機器の使い方」に工夫がある」に 対し非常に、だいたいと回答する割合が A: 9割以上 B: 7割以上 C: B以下	各学年でiPad等を活用した授業展開を行っている。今後は前期の授業評価アンケートや取り組みをもとに、成果検証および情報共有を行っている。	B	動画配信、個別添削、軌跡や空間図形の把握、生徒の解答の全体共有、小テスト、フラッシュ教材など教員のICT活用事例を集め、成果の情報共有を図った。授業評価アンケートの結果、「非常に」の回答が7月77.3%、12月78.6%であった。	B	①具体物がない場合にICT機器で提示し、意欲を高められる。②動画授業は生徒の主体性に大きく依存するため、動機付けや取組状況の丁寧な把握が必要。③一方向の動画授業や視覚情報が残らないICTでは、高難易度のもものは成果が出にくい。④準備の労力と成果が合わない反面、再利用が容易。	A
	理科		「Google Workspace for Education」および1年次生ではiPadを、実験でのデータ解析、小テストの実施、レポート課題の作成・提出、授業やテストの振り返り、実験手法の動画解説や補習動画の配信などに活用することで、生徒が意欲的かつ効率的に学べ、個々の能力の伸長につながる状況の実現を図る。	昨年度「Google Workspace for Education」が十分に活用されたとは言えない。	新しい取り組みの数に応じて評価する。 A: 年間5つ以上 B: 年間3つ以上4つ以下 C: 年間2つ以下	これまでに以下の2つについて実施した。 ①Formsによる補習参加希望者の調査 ②ARアプリによる自主学習の提案 ①②いずれも単発の企画であり、十分に活用している、できていないとは言えない。	C	中間期に述べたもの以外に、次のような取り組みを行った。 ③Quizletを用いたクイズ大会 ④Classroom上での問題演習の提案 また、3学期には授業動画の配信を実施した。ただし、いずれも継続的には実施できておらず、総じて活用できたとは言えない。	C	左記の結果の原因としては、有用なアプリや活用方法のリサーチ、ipadの活用を含んだ教材研究が不十分であったことが挙げられる。校内は勿論のこと、教育庁情報化推進室から提供されている活用事例や他校教員との情報交換によって、端末活用に関する視野を拡げなければならぬ。また、分掌や担任業務について大幅な精選を行い、教材研究が十分に行える体制を整えていく必要がある。	
	英語科		授業で速読教材を取り入れ、英文読解力をつける	昨年度1月進研の長文読解の結果は、1年生は全国平均が7.4点に対し、本校は7.1点であった。また2年生の1月進研の長文読解の結果は、全国平均が12.5点に対し、本校では11.6点だった	今年度、1～3年生の進研記述模試の読解問題の結果を平均する。 全国平均点以上でA、平均点より3点以上B、それ未満であればC	7月進研模試の長文読解問題の結果 平均 全国平均 1年 9点 11.6点 2年 14.1点 14.9点 3年 23.6点 24.7点	B	1、2年生は11月、3年生は10月記述の結果 本校平均 全国平均 1年 6.0 5.5 2年 7.2 7.55 3年 9.45 12.8.	B	各学年の読解力向上に向けて様々な取り組みを行っているが、良い結果が得られなかった。速読に加え、精読の力も付けていくことが求められる。	
	情報		ICTの効果的な活用を通して、生徒の思考力・判断力・表現力等を育成する。1学期にワード、2学期にエクセル、3学期にパワーポイント等を活用しながら、自分の考えや情報を他者にわかりやすく伝える活動をさせる。	自分の考えを他者と共有しながら、よりよい考え方を身に付ける必要がある。パソコン利用についてのアンケートを実施した結果、使ったことがない・不安であると回答した割合は、ワード52.1%、エクセル55.3%、パワーポイント34%であった。	生徒アンケートを実施し、思考力・判断力・表現力等を身に付けることができた」と回答した生徒の割合で評価する。 A: 8割以上が肯定的回答 B: 7割以上が肯定的回答 C: B基準未満	1学期にはWordに取り組んだ。文書や表などの作品(課題)の評価点では8割以上の生徒が80点以上(100点満点)をとるなど、Wordのスキルを身に付けることができていた。今後はエクセルを取り扱っていく。	A	思考力・判断力・表現力を「文書作成や表作成、関数を用いた計算などの情報スキルが身につく、それらを用いて様々な情報を他者にわかりやすく伝えることができる」に 対し、肯定的な解答が94.9%であった。	A	とてもそう思う・そう思うの内訳が38.5%・56.4%であった。完成されているものを例に同じものを作成することはほとんどの生徒が問題なくできるが、0から自分で考えて作成する課題については作成できない生徒が多かった。今後は創造力を意識した指導を行っていく。	

## 令和3年度 新見高等学校(南校地) 具体的計画

学校経営目標	1 校地間、学科間、学校と地域や家庭の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 特に校地間・学科間の「融合」に向けた取組の推進 2 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力等を育む効果的な教科指導の工夫 特に1人1台端末の有効な活用方法の研究 3 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 特に昨年度中止となった地域連携活動の復活と中学校との連携を継続発展 4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開 特に「新見高校広報全体計画」の具現化									
	番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準【評価指標】	中間評価	最終評価			総合評価
						達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	
3	保健体育		ICT機器を効果的に活用し、リフレクション映像による課題の即時フィードバックや攻防のための話し合いを行い、主体的な学びを深める。また、リフレクション映像を評価材料としても活用し、継続的かつ客観的根拠のある評価の充実に取り組む。そのため、体育科全員(常勤3名)が、リフレクション映像の撮影を行い、教科指導及び評価の工夫を図る。	表現活動を充実させ、主体的な学習を促すとともに、客観性や継続性のある評価の工夫が必要である。	年間を通して取り組んでいく。 A…3名取り組んだ。 B…2名のみ。 C…1名のみ。	リフレクション映像による即時フィードバックに関しては、3名とも実施することができている。また、ルールの確認や、授業の流れなどを説明する際に、パワーポイントを効果的に活用した。それにより、具体的なイメージを持たせ、主体的な動きを促すことができた。評価材料としての活用は、学年・種目によって実施できていないものもあるため、スキルテストを中心に活用法を検討していく。	B	リフレクション映像によるフィードバックは、2学期に引き続き3名とも実施することができた。また、新しくクラスルームを活用しての授業連絡やフォームでのアンケート実施も行った。さらに、デモンストレーション動画を活用し、全体で動きのイメージを持たせることもできた。評価に関しても全学年での活用は出来なかったが、有効性の高い種目において3名とも実施することができた。	A	評価材料としての活用が3年次で実施することができなかった理由としては、選択制授業の形で生徒が授業案を作成し、実施するため、教員が活用のタイミングをコントロールすることが困難であったことが考えられる。また、必要台数が不足していることも理由として考えられる。改善策としては、事前指導でICTを活用するように指示することや活用法の具定例を提示しておくことが上げられる。
	生徒課		委員会活動のさらなる活性化によって、主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成を図る。委員会によるHR・集会での呼びかけをこれまで以上にを行うことにより、学校生活の向上に向けた啓発活動を行う。	各委員会とも活動は行われていて、一定の成果を上げている。しかし、すべての活動が生徒全体に目に見える形で、取組の目的や成果が明らかにされているとは言えない。	委員会活動に関する全校アンケートを行う。「委員会活動が活発に行われている」と回答する生徒の意見がA:95%以上 B:80%以上 C:Bに満たない	委員会を開催しにくい環境ではあるが、委員会生徒によるHRでの啓発活動が行えるよう、生徒に指導していく。また、全校が集まる集会等においても、委員会からの呼びかけ等を企画し、全校生徒への啓発を行う。	B	生徒会活動に関する生徒を対象としたアンケートを行った結果、95.5%以上の生徒が「委員会活動が活発に行われている」と回答した。	A	今年度も委員会顧問による指導により、各委員会とも活発な活動が行われていた。掲示板などを活用して広報・啓発を行った。委員会新聞を充実させたりすることで、生徒の目に見える活動として活発化していると感じている。
	地域連携広報室		専門科では昨年度中止になった地域連携活動を可能な範囲で復活させると共に、新たに始めた中学校への出前授業を継続させる。普通科では、引き続き学校連携コーディネーターと連携・協働しながら、主権者教育を中心とした総合的な探究の時間の取組を通して、主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を育成する。	昨年度、学校自己評価アンケートの地域連携に関する項目において肯定的評価は75%であった。予定していた地域との連携活動の多くが中止になった一方、新規に中学校への出前授業を行い、好評であった。主権者教育は休校期間以外は概ね計画通りに実施され、学校連携コーディネーターからの支援も受けて、より充実した活動となった。	年度末の学校自己評価アンケートの地域連携に関する項目において、 A: 肯定的評価が80%超 B: 肯定的評価が70%超 C: 肯定的評価が70%以下	総合ビジネス科2年次生の販売実習など昨年度中止になった地域連携活動は可能な範囲で復活させられている。今後も出前授業等が計画されている。第1回オープンスクールは今年度内容を刷新したが、概ね良好であった。感染症の広まりを注視しつつ実施可能性を探ることが今後の課題である。	-	9月以降も地域連携活動が相次いで復活させられた。中学校への出前授業も定着してきた。学校自己評価アンケートの地域連携に関する項目において肯定的評価は64.6%であった。	C	地域連携活動は出前授業や販売実習、主権者教育など外部からの評価は非常に高い。また、担当した生徒達の地域に貢献しようとする使命感と実力の育成に多大な効果をもたらしている。一方で地域連携に携わる生徒が限られており、生徒全体の力とはなりにくい側面がある。時間的には厳しいが、地域連携活動に関する報告会などを実施して、経験を共有できる機会が設けられれば良い。
3年次		主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒を育成するとともに、主権者教育、MFM、ボランティア活動等、本人の強みを生かしながら、適切な指導を行い、進路実現へつなげる。	1年次から各教科・総合的な探究の時間等を通して、思考力・判断力・表現力等や主体的に社会に貢献しようとする姿勢を養ってきた。また、総合型選抜・学校推薦型選抜に対する指導の重要性が増している。昨年度、国公立大学総合型選抜・学校推薦型選抜受験者36名のうち、22名(61.1%)が合格。	総合型選抜・学校推薦型選抜受験者のうち A: 3分の2以上の生徒が合格 B: 2分の1以上の生徒が合格 C: B未満の生徒が合格	個人面談・三者面談等を通して、生徒本人の希望進路と適性を考慮した情報提供や進路指導に努めている。	B	総合型選抜・学校推薦型選抜受験者のべ49名のうち、36名が合格。合格率は73.5%であった。国公立大学総合型選抜・学校推薦型選抜に限れば、受験者12名のうち、10名が合格。	A	生徒が、1年次から各教科・総探等で身に付けてきた力を発揮したことはもちろんであるが、担任・副担任の先生方のきめ細かな面談を通して、生徒の希望進路と生徒の持つ経験や能力に適した受験方法を提案していただいたこと、学校全体で推薦指導に当たってくださったことも合格率上昇に繋がった。	

## 令和3年度 新見高等学校(南校地) 具体的計画

番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準 【評価指標】	中間評価		最終評価			総評 合価
					達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	結果の分析及び改善方策	
<p>学校経営目標</p> <p>1 校地間、学科間、学校と地域や家庭の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 特に校地間・学科間の「融合」に向けた取組の推進</p> <p>2 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力等を育む効果的な教科指導の工夫 特に1人1台端末の有効な活用方法の研究</p> <p>3 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 特に昨年度中止となった地域連携活動の復活と中学校との連携を継続発展</p> <p>4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開 特に「新見高校広報全体計画」の具現化</p>										
	2年次	学校連携コーディネーターと連携・協働しながら、主権者教育を中心とした総合的な探究の時間の取組を通して、主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を育成する。	地域や社会に対して積極的に関わった経験を持つ生徒は多くない。また、1年次に取り組んだ小論文やディベートで身につけた思考力・表現力を活動を通して必要性を理解し、伸ばしていくことが重要である。	生徒アンケートを実施し、地域・社会の問題を「自分の問題」として捉え、行動しようとする気持ちが高まったと回答した生徒の割合で評価する。 A 8割以上が肯定的回答 B 7割以上が肯定的回答 C B基準未満	現在個人探究を進めている。7月には中部大学の井上教授によって、生徒たちにプレゼンテーション講座をして頂いた。また、GTの取組についてもアドバイスを頂いた。今後の個人探究とグループ研究をより良いものにするために、アドバイスを活かしつつ取り組んでいく。	A	「自分の問題」として捉え、行動しようとする気持ちが高まったか」に対して、生徒たちの回答は、「非常に」が66%、「だいたい」が29%と肯定的意見が95%という結果となった。	A	結果はまだ分からないが、改善の余地がある。授業の時間数が足りないため、一年生から探究活動を進めるの必要を感じる。	
4	教務課	生徒募集にかかわる広報活動指標に示した①～③の取り組みを中心とする。	令和3年度入学者は市内中学生の6割程度の進学者を迎えることができた。昨年度に引き続き、広報活動のみが生徒募集の切り札とは限らないが、一手立てとする必要がある(オープンスクール)。また、令和4年度からの新見高校の変化を広報に取り入れ、地域、中学生に向け、新見高校の姿を正しく知らせる必要がある。	①学校案内のマイナーチェンジ ②新しいオープンスクール実施 ③その他の工夫とイノベーション A…①②③ B…①② C…①	①完了 ②第1回終了、第2回に向けて準備中 ③新しい新見高校説明ちらし作成完了。にいが通信を計画に沿って発行中。2学期中に保護者説明会開催等、新しい新見高校についての質問に答える機会(対中学生、保護者)を企画中。	B	①完了 ②完了 ③完了→新しい新見高校説明チラシ作成、計画に沿ったにいが通信発行、11月中学生保護者向け進学説明会開催、その後質問をまとめた通信発行等、様々な工夫を行うことが出来た。	A	今年度の内容を振り返り、来年度に向けてそれぞれの内容について企画中。教員の負担を最小限にしながら、より効果的な広報が出来るよう今後検討・実施したい。	
	地域連携 広報室	各部署と連携して、昨年度策定した広報全体計画を具現化していく。	昨年度、ホームページを更新した。また報道機関や市報にのみ、SNS等を通じて可能な限りの情報発信をしたが、予定していた教育活動や部活動の大会等が複数中止になったのが残念であった。また中学校に対してアンケートを実施するなど、地域のニーズを把握した情報発信ができた。更に昨年度は広報全体計画を策定した。	11月に振り返りを行い、 A: 広報全体計画が実現できた。 B: 広報全体計画が概ね実現できた。 C: 広報全体計画があまり実現できなかった。	昨年度中止された地域連携活動などの取り組みを可能な限り復活させている。広報活動もオープンスクールや学校新聞を刷新するなど全体計画が具現化しつつある。 11月に1年間を振り返り、次年度よりよい広報全体計画を策定したい。	-	11月に1年間を振り返り、いくつかの修正点はあったが、広報全体計画が実現できたと考えた。10月に実施した第2回オープンスクールも好評であった。加えて市報にのみ7月号に今後の本校の姿を示したりフリープレットを挟み込んだり、7月と11月に中学生保護者に対する説明会も実施できた。	A	今回は昨期の取組を踏襲しつつ、反省点を修正し、定着させることを基本方針にする。ただし、各部署で負担が大きくなるよう実施する。	A